

“ 絵を見ること，絵を読むこと ”

— わたしたちの感性を磨くために

美術家・弘前大学名誉教授 村上善男

村上善男と申します。何かどうも非常に場違いな話になるんじゃないかな、とちょっと心配していたんですけど、こうしてここに立ってみると、私をどういう理由で呼んで下さったのかということ、が少し解りかけたような気がします。

7月12日のことでした。私が体験した話から、進めてみたいと思います。12日にどこに行っていたかと札幌に行っておりました。ここには、札幌からお出での先生もいらっしゃるかもしれませんが、その先生なら多分ご存知だろうと思うんですが、札幌には、「芸術の森」というところがあります。これはあの、普通「美術館」というのは、街の真ん中にあるのがあたり前なんですけど、札幌の“芸術の森”というの、札幌市内といってもずっと郊外でして、そこは、緑深い本当の森です。その札幌“芸術の森”の中にある屋外彫刻は、日本では最も有名な箱根の彫刻の森に比べてでも、遜色のないような素晴らしい施設です。世界中の著名な彫刻家の仕事が、そこに設置されて、私たちが三々五々見て歩くわけなんです。その一角に小さな美術館が建ってます。ここは、常設でいつも絵をそこに並べているわけではなくて、企画があった時に、展覧会をしたりするという場所であります。そこに私たちが行ったと思って下さい。

たまたまその私が行った日の前日、北海道大学で私の授業があったものですから、柳田国男論とか、「遠野物語」論というのをお話しをして、とても楽しい思いをしました。で、そのあくる日だったわけですね。私がつたまたま札幌にいるからっ

ていうことで、NHK 弘前文化講座というのがあります。鑑賞講座、つまり、絵の鑑賞の講座があるんです。その人たちのグループが35人、飛行機で札幌までやって来て、私が札幌にいるときに、一緒に研修っていうのかな、勉強会をしよう、という計画だったんです。そこで35人の人と私が“芸術の森”に入って行って、その「美術館」の中の一つの展覧会に入ったわけです。そしたらですね、その展覧会の会場は何の展覧会をやっていたかという事を話さないと話になりませんから、言いますと、ご存知かどうか、イサム・ノグチという彫刻家の展覧会があったのです。

イサム・ノグチ…。イサム・ノグチは、野口米次郎のご子息で、詩人の米次郎のですね。母親がアメリカのレオニー・ギルモア（作家）との間に生まれた子供さんなわけですね。その会場はどんな会場かという、彫刻がもちろん並んでいるんですけど、今度の展覧会は石彫の彫刻が主だったものですから彫刻の部屋をこうずうっと辿って歩いてゆきます。

普通一般に彫刻の展覧会というのは、明るい照明があたって、非常に素敵な、何て言うか、独特の雰囲気をかもしだすものが多いんですけど、イサム・ノグチの展覧会の場合には、照明がものすごく暗かった。照明が暗いということは、何を意味するのか。スポットライト、または、ピン・ライトで彫刻を照らし出している。しかも何ヶ所からか照らし出しているものですから、彫刻には微妙な陰影が降りている。しかし部屋全体は暗い。

それで、床は木の板でできている。フロアっていうか、要するに美術館ですからね、フロアはピカピカに磨いてありますけれども、そこに彫刻を設置してあるんだけど、ライトが強くてあたってから、床の材質感はない。そこを私たちは散歩していく。

私はイサム・ノグチっていう彫刻家の仕事っていうのは、いっぱい見て来ているんです。フランスでも見たし、イタリアでも見たし、いろいろ見てきたんですけど、今度ほどイサム・ノグチの偉大さに打たれた事はありませんでした。ちょっと会場の皆様も想像してみてください。何でも自然石があります。その自然石の一角を鋭利な刃物で切ったように、彫られています。そこがテカテカに磨かれている。その磨かれている所と磨かれていない所とのその境目の所が微妙に処理してある。何か日本のですね、伝統というものと、現代のアメリカの、鋭利な感覚とが結婚したような仕事というか、で本当に打たれてじっと立っていました。すると、となりの部屋から泣き声が聞こえてきた。

泣き声っていうのも、これは明らかに女の人の泣き声でしたが、ジーとその泣き声を聞いて、「何で泣いているんだろう？」と思いました。私も解説者として行っている手前もあって、その人が誰であるのか見にいきました。そしたら私たちの旅行に参加をしようとして申し込んだSさんという方が、お家のご都合によって参加できなくなって、高いお金がかかる往復飛行機だから、もったいないので、秋元さんっていう、知人のおばあちゃんに譲った訳ですね。「おばあちゃん」という言い方、ちょっと変ですけどね、70歳前後というように思って下さいね。秋元さんが泣いておられた。それで私は近づいて「どうなさったんですか？」と聞きました。美術館の会場ですよ。美術館で泣いてるというのは、これは彫刻を見て泣いているのか、それとも突然の腹痛で泣いているの

か解りませんよね。

それで、秋元和子さんに近づいていって、何を見て泣いているのかを探たらね、秋元さんの目の前にイサム・ノグチのお墓の写真がありました。

それでそのイサム・ノグチの墓の写真というのは、イサム・ノグチが生きているとき、生前に自分の墓はこの墓でなければならぬと言っていた石で、それはどんな石かというところいう自然石です。ちょうど一抱えぐらいある自然石です。その自然石にほんのすこしだけ手を加えているだけで、でその石がポンと置いてあって、向こう側にちょうど月が出ている。その月が逆光のような形でその墓を照らし出している。

それを秋元さんは眺めて泣きだした。簡単に言ってしまうとイサム・ノグチの彫刻というのは、人間が生きていくための喜び、物が誕生する時の形、物がこれから生まれて育っていくときのそういう形と、人間が死んでしまったあとの死の形と、生と死が同居しているような彫刻なんだなあと、思い至りました。理屈っぽく言えば、人間の生と死が内包された芸術を創っているイサム・ノグチ。まさに世界のトップランナーと思えるのです。現代彫刻のトップランナーですね。

しかし、秋元さんは、昨日の昨日まで、ただの一度も展覧会というものを見たこともなければ、美術館という所も訪ねたこともない。その人が泣けるというのは何なのか？秋元さんは長い自分の人生の中で自分自身の体験をもって生きてこられて、その生きてこられた体験と、目の前にある石と、石の彫刻と、そして最終的にイサム・ノグチの墓に採用された自然石…。その写真を見て、どうすることもできなくなって、泣き出してしまわれた。

私は秋元さんの涙から次の事を考えました。それは何かというと、彫刻のもっている、本来の色と形、それから手触り、理屈っぽくいうとテクスチャということになるんですけど、私たちは普

通、日常的に実際に物に触らないと、物の感覚がつかめない人間たちですよ。今日、皆さんに私が一番言いたい事を先にもう言ってしまえば、私たちは「目で触る」ということの訓練になれてませんよね。

私たちは物に触って、例えばお隣に座っておられる方に触ってその方が着ておられる、洋服なら洋服のマチエールとか、デスクチェアというものに、触る事によって初めて解るけれども、しかし長い経験で触らなくても、目でそれが解るようになってくる。これはある種の慣れであり、我々の感覚がそうさせているんだと思います。

秋元さんは生まれて初めて現代彫刻を見て、しかも現代彫刻の世界の最先端を見て、そして泣き出したということは、イサム・ノグチの彫刻のもっている大きな力と、それから秋元さんの人生とが、みごとに彫刻の上で重なったということだと思います。月の光りがさしていたということも、その彫刻を非常にドラマティックに見せていたんじゃないかなと思います。

えー私たちは毎日美術作品と暮らしているわけじゃありませんよね。私はたまたま美術家ですので、毎日淡々と絵を描いて過ごすという時間が多いです。最近はそんな時間はとれなくなったりすることもあってあせったりもします。しかし私が皆さんに聞いてみたいと思うのですが、会場におられる皆様は、今までさっき秋元さんのような体験をもたれた方はいらっしゃるでしょうか？。どなたか他人の絵の前で何か知らないものすごいさびしさに襲われたり、ある種の感動をおぼえたり、何か背中につめたい物が走るような感覚をもった事がありますか？それでもう一つお聞きしたいのは、これは本当に聞きたいことですが、先生方はこの3年間の間でかまいませんけど、3年間の間で美術館というものに足を運ばれたことのある方、ちょっと手を挙げてみて下さい…。

はい、さすがというべきか、まさかという気持ちも若干ないわけでもなかったんですけども（笑）、ずいぶん大勢の方が手を挙げて下さいました。先程控室で雑談をしているときに弘前大学の先生方の皆さんが久留米で研究会かなんかあった時に、「石橋美術館」を見てこられたというので、思わずえらいと言ってしまいました。（笑）

私たちは今日のような大会で集まったり、いろいろな各地を歩いたりした時に、真っ先に、お仕事はお仕事としてやりますけれども、その後どこか行くとすれば「美術館」へというのは、これは私は皆様に実行していただきたい一番の大きな課題です。たくさんの絵を見ていただいたり、「美術館」を見ていただくということは、私たちの人生にとってものすごく大事である。どういう風に大事なのかを、私はこれから皆様にお話するために、ここに現れた訳です。

日常的に暮らしていく中で、ご自宅に美術作品が一点もなくとも、生活はしていけるわけです。私は、美術の中で暮らしていますから、私の家には、いっぱい絵があると思われる方もいらっしゃる、と思いますけれど、逆でありまして、私の場合には、ほとんど絵はありませんし、持っていてもそれを常時かけているということの中々ないのです。皆様方は、いかがでしょうか？ご自宅の中にどんな形であれ、絵をかけておられますでしょうか？極端な言い方をすれば、絵がなくても食べていけるわけですよ。生活していけるわけです。

つまり芸術なんて芸術的な雰囲気家が中になくとも、何もそのような物がなくとも、花がないと生きていけないかもわからないけれども、生きていけるわけです。しかし本当にそうだろうか？と今考えているわけです。つまり絵とつきあうことができるかできないか、そのことが私たちの人生にどういう意味をもつのか。もし一枚そこに絵があれば、自分たちの人生がどうかかわるのか？

あるいは、その絵によって何が私たちにもたらされるのか？さすがに花がないと生きていけないという人がいても、美術作品が一点もない生活でも私たちは暮らしていけるわけです。

もしそういう風な事を考えていった場合に、これは皆さんに直接うかがった方が早いんですけど、皆さんの応接間にでもけっこうですし、玄関でもけっこうですし、子供さんの絵でもけっこうですから、何かご自宅に絵がかけてある状態、今かけてあるという方、ちょっと手を挙げてください…。はい、ありがとうございます。思いがけぬすごい数ですね。(笑い) さきほどの美術館に行ったこと、3年間の間で行ったことのある数と今の数を合わせれば、ほとんど圧倒的にそういう経験をお持ちの方が多ようです。それでは、その絵は私たちに向かって何を呼びかけているのだろうか？私は子供の時から絵が大好きでここまでやってきたわけではありません。できるだけ早く大急ぎで自分の経験を言ってしまうのだけれど、私の家は決して豊かでもないし、いい暮らしでもありませんでした。はっきり言ってしまえば、何故村上は、非行少年にならなかったと言われるくらい、荒んだ家でした。もっと簡単に言ってしまえば、母が早くに死んでしまったために、父の恋愛と再婚があって、私と私の弟とおばあちゃんとおじいちゃんと4人の暮らしが強いられたわけですが、小学校の4年生ぐらいから、そういう状態だったものですから、もしあの大きな戦争がなければ、完璧に非行少年に走っていただろうと思うような環境でした。

その中にたまたま佐々木正一という教育実習生の先生が現れて、私の小さな水彩だったのですが、それを本当に、口を極めて褒めてくれました。私はもちろん、それをそのまま信じたわけではないんですけども、何かその事によって、私は何か絵を描くことが、自分の救いになるんだということに気づいて、わき道にそれないで、今までこれ

たんじゃないかなと、今思えるのです。

先生方は戦後すぐの教育を受けられた先生方もいるし、昨日、今日の、昨日、今日のという言い方も変ですけど、10年、20年先の教育をうけられた方もいるので、一概に言えないと思いますが、こういう事があった事だけは記憶しておいてほしいと思います。戦争で日本が負けて、その後どうすることもできない状況の中から立ち直ってきたわけですが、その中で美術教育ってのはどんな風な形で進められたか。「創造美術教育」という活動が非常に盛んだった時代があるんです。それは何かって言いますと、こういう風に全国でいろいろな大会が開かれますよね、大会に全国の先生方が大挙して押しかけて行って、そして皆で互いに励まし合う。自分の受け持っている子供たちの絵を持ちよって、皆で批評しあい、活発な討論をし、盛り上げて、子供たちが自由に個性的な育ち方をするようになっていう教育、が盛んだった時代があったんです。その時代はだいたい私の見当では、20年ぐらい続いたのではないのでしょうか。

その中で私の友人で、残念な死に方をした池田満寿夫君もいましたし、私のような人間もそういう美術教育の中で、一生懸命活動しました。その時に起こった大きな過ちがあると思います。その過ちを皆さんに伝えたいわけです。

その時私はこんな風に私たちの先生から学びました。主な先生の中で一番の指導者は久保貞次郎先生でありました。この先生がリーダーであるせいではないのですが、美術教育の中で一番大事なことは、とにかく、他人の絵を見た時に、自分がいいと思ったらそれでいいんだ、ということです。自分が、あるひとつの絵をみるとするでしょ。そしていいと思う。自分がいいと思ったらいいんだ、そのことを大事にして生きていけばいいんだ、そういう教育をしてきた訳です。この教育のあり方は絶対間違いありません。まさにその通りです。ですからここに座っておられる皆様方、そしてこ

の3年間の間に美術館に行った事のある方々は、ご自身が今、私から質問を受けずとも、多分、「私はこういう絵が好きだ。どどこ美術館の、この作品が好きだ。どどこ美術館のこの絵が大好きだ」というお気持ちがあると思います。しかもヨーロッパまで出掛けて、絵をご覧になった人もいるはずです。それでそのご自分が好きだと思っている絵、好きだと思っている美術家のことを思うことは悪いはずがない。

しかしここで考えてみたいと思います。それは何かというと、自分が嫌いな絵はそれでは駄目だったのか？簡単に人生の中から捨て去ってしまっただろうか？好きとは何か？嫌いとはなにか？実は美術作品というのは、ご自宅の中に飾ってある絵さえも、毎日毎日、違った表情を見せるのが、芸術作品なのです。ということは何を意味するかというと、絵というのは“自分を照らし出す鏡”なんですね。たとえば、自分が嫌いだと思って全然見もしない、あるいは見向きもしないような絵も、長い人生の間でその絵の良さが解ってこないとは限らない、という事です。つまり嫌いな絵というのは、どういうことを意味するかというと、その絵が悪いのではなく、この絵が好きになれない自分がここにいるという、事実の証明なのです。その事を実は大事に考えて行きたいわけです。それが私たちの感性というものではないでしょうか。この色は許せるけど、この色は許せない。極端な言い方をすれば、ある仲良しの友達同士が相手に電話をかけて、「今日貴方は何を着てくるの？私は赤いドレスを着ていきたいと思う。」「ああそう、貴方が赤いドレスなら私は緑にする。」という。そういう人は居ないと思いますけど、その赤と緑が街を歩いた時の不気味さを想像してみてください。お互い同士、殺し合いながら歩くようなものでして、ちょっと信じがたい事になるわけです。

つまり私が何を言いたいかと申しますと、友達

は赤い色のドレスが好きで、赤い色が好きなんだけれど、しかし私はどうしても赤い色が好きになれない。しかし他人の着ている赤なら許せる、というところまでいかないといけないということがあります。そのあたりが美術を考えていく上で難しいところでもあります。くどいですが、もう一度繰り返させていただきます。

戦後の美術教育で一番まずかったこと、それは「いいと思ったらいいんだ。」「貴方がいいと思ったらいいのよ。」という教育が蔓延していて、貴方が嫌いだったという絵の運命について、一度もかえり見ようとしなかったこと。私はそのことが大きな過ちだったように思うのです。

今、私は皆さんに、あらためて問いかけてみようと思います。私たちは一生の間で何人の好きな美術作品をもつことができるでしょうか？また私たちは心の中で何人の好きな美術家を持ち、あの世まで自分と一緒に想いの中で持っていけるのでしょうか？と。これはよく考えてみると、難しいのですがとても大事な問題であるように思います。

私が中学生のときでしたけれども、一枚の絵で大変ショックをうけたことがあります。会場におられる皆様方の中には、今私が申し上げる画家の名前を聞いて、ご存知の方はなかなかおられないかと思えます。一応、念のため聞いておきたいと思えます。「松本竣介」をご存知でしょうか？お手をお挙げ下さい。

すごいですねー。さすがに。あっ弘前大学の福嶋松郎先生が手を挙げて下さっておられる。あとの皆さんはシーンとされて…（笑い）。さっきの元気はどこにいったんでしょうか？（笑い）青山で生まれたのですが、育ったのは花巻、盛岡でした。そして盛岡の中学校時代に耳が聞こえなくなるという状況になってしまいます。竣介の「竣」というのは立つという字を書いて書いた「竣」ですけど、以前は佐藤俊介でしたけれども、結婚を機に俊介の「俊」という字を「竣」という字に変

えました。それで松本竣介というんです。

ちなみに皆さんがこれからいろいろな出会いの中で「好きな画家は誰ですか？」と誰かに聞かれた時に、「松本竣介」と言えたら凄いいんじゃないかなと思うんです。なぜならば、松本竣介というのはそんなに有名ではないのですが、これほど優れた画家は居ないというふうに言われている画家だからです。(笑)

それでこの松本竣介ですが、先程も言いましたように、中学校の時、小学校の時からもうトラブルがあったんですけど、中学の時には、体調も良くななくて、耳が聞こえなくなりました。いろいろな絵を描きましたけれども、ブルーを主体とした風景画を、数多く発表して亡くなっていくわけです。30歳の半ばで、いわば夭折の画家として知られています。

この竣介が描いた絵でちょっと気になる絵があります。何でも無い風景画なんですけれどその風景は必ず俯瞰の風景なんです。街の風景ですね。そしてその街の中には、人々の生活している姿が、生き生きと描き出されています。もう一度繰り返しますけれど俯瞰で見た雰囲気があります。そして手前に人物がいて、中景の人物がダブるように、重なるように描いています。それで人物は透けて見えてその人物の後ろにある建物も透けて見えるような表現になっているんです。透視図のような感じですね。そして深いんです。ずうっと奥まで風景は続いています。よく見るとその建物のすぐ前に人が歩いたりしている。小さな姿なども本当に蟻が歩いているような小さな描写もあります。

この松本竣介の絵には、必ずといっていいくらい時計台が描かれています。それから何かしら白い塔が描かれています。白い塔が浮かんでいるのです。ヨーロッパの風景じゃないですよ。私がこれを中学生の時に感動し、今こういう年齢になるまでずっと感動し続けています。竣介を追いかけて私が書いた先程紹介していただいた『松本竣介

とその友人達』(新潮社)という本は、私が松本竣介を辿った跡が書物になったという形のものでありますけれども、松本竣介を辿っているうちに、彼の絵には白い塔、教会みたいな塔、何か怪しげな塔がいっぱい出てくる。それでそれが何だろうかと思って色々考えました。そしたらあることに気付いたのです。

時計台というのは、もしかしたら松本竣介が学んだ盛岡中学校の時計台なのではないか、ということ。絵を「観る」ということは、絵を「読む」ことでもあります。ああ、この絵はいいなあ、いい絵だなあ、色が好きだなあという風に絵を見ることです。しかし、その見た絵の中に何か自分に訴えかけている何かがあれば、そこで絵を考えた、絵を読むことというのは、その絵に入っていくためにはどうしても必要な事ですよね。

何故竣介はこんな時計台を描かなくてはならないんだろう？どの絵にも風景という風景に何故こんな風に時計台を、繰り返し描かなくてはならないのだろう？と思ったら、松本竣介の少年時代に通った、盛岡中学校の事を思いうかべないっていう手はないと思います。竣介がその頃中学校に通っていた所、盛岡中学校の建物はどうなっていたかと調べてみたら、真っ白いペンキを塗り立てたばかりの校舎が、できあがった年から2年目の事でした。つまり竣介は生涯の記憶として、自分の大切な風景として盛岡中学校というものが体の中に入っていて、それから東京へ出ても美術の活動をする中で、繰り返し繰り返し、その風景が蘇ってきたのではないのでしょうか？

そしてその時計台は音を発しているものです。時計ですから。それから街の騒音も、全部音となって立ちのぼっていたに違いない。竣介は耳が聞こえないけれど、音のある風景を描いていたことが、読めてくるわけです。そうすると竣介の絵を見て、いい、悪いと言っていた鼻先で、竣介の絵は素敵だと思ったことよりも、竣介の絵の中に一歩も二

歩も入って行って、耳の聞こえない峻介が街の騒音、かつて聞いたことのある街の騒音を描いているんだ。盛岡中学も重ねているんだ。現実にはそういう風景はないのだけれども、峻介の幻の都市風景なんだ。ということが少しずつ読めてくるわけです。

読めるということはとても良いことだと思うのです。皆様方をお願いしたいことは、絵は見るものであるのももちろんですが、絵を読むということは実に非常に大切なことなのではないか、つまり絵の中で展開されている物語りを私たちは見ていかなければならないのではないかと思うんです。そうする事によってその絵の中に一歩も二歩も入っていくということは、取りも直さず人間観察になるだろうと思います。

私は非常に幸せなことに、幼稚園の園長というのをやらせていただきました。幸せだと今言いましたが、教授会選挙の結果幼稚園の園長になったということを聞かされた時、静岡県に出張中の私は、本当にこんな嫌なことが、何で自分の人生にふりかかってきたのか？（笑い）毎日幼稚園に行き、自分の仕事もする、などとてもできるものじゃない、やだやだと思っていました。ところが実際に幼稚園に行ってみて、一日一日幼稚園で過ごしている間に、一枚ずつ薄皮が剥げていくように、これは大変な有意義な仕事だなという事が解ってきました。そして私は逆に園長先生という仕事を3年間、与えられたことに、感謝するようになりました。そうなるための3年間でした。その中で一番私にとってうれしかったことは幼稚園の日々の生活ではありません。幼稚園の日々も楽しかったし、皆様方にお話ししたい事もいっぱいあります。山ほどあります。私の作詞・作曲した運動会の歌も聞かせたいです。（笑い）ここで歌ってみたいくらいです。（笑い）しかしそんな事よりも、私が一番大事だと思ったのは、養護

学校に私が入り出できることだったのです。養護学校という学校のことを全く知らずに大学の教官を続けていました。そして養護学校で私は水野学部長先生と一緒にいたのですが、お呼ばれで行って、挨拶をし、そういう席に顔を出さなければならぬ立場になりました。

学芸会に行ったときのことで、養護の子供達が演じている演技を見て、その演技が中々上手いかな。教わった通り演技をやっているのだけれど、上手いかなと途中で、忘れてたりする。それを幕の後ろから手を出して先生方が合図する。その手もまるみえである。こちらでは、泣いたり、笑ったり、お父さんやお母さんが家の子はあんなに長いセリフをしゃべれるのかと感激したり、もう、とにかく会場全体がドラマで涙が止まらない。私は何とか涙をこらえて我慢している。ふっととなりの水野先生の方を見たら水野先生も泣いておられたので、こりゃ大丈夫だと思って私も泣いたんです。（笑い）

そしてこの場所で、私自身教師だったり、美術家として、今までやってきて「あゝ駄目だったなあ。何も解っちゃいなかったなあ」と思えてきました。簡単に言えば、心が洗われたわけです。その洗われたということはどんな風なことかと言うと、アメリカの小児科のお医者様のことをちょっと話したいと思います。

カナーという自閉症の研究で有名なお医者様なんですね。いまその事について私が書いたメモをみますが、ちょっと怪しいところもありますが、そのカナー先生の意図をできるだけ正確に伝えたいと思います。

障害のある人々、自閉の子供がいますね。自閉症の子供達がいる。でもそれは遠い宇宙からやって来た子供だ、なんて考えたらとんでもない大きな間違い、であるわけです。私たちと同じ起源をもち、同じ起源でうまれてきたその不思議さ…。

しかし一見他からやってきた子供のように見える。全く無関係のように行動しているように映るその子供達。自閉の子供達。しかしその自閉の子供達が秘めている能力、その能力は全く今私達に見えていない。たとえば、馬と自由に語ることができ、魚と自由に語ることができ、水の中に入らずとも、水の中の風景が自由に見ることができる。非常に特別な才能をもった子供達なのです。そういう事をカナーさんはおっしゃっている。まさにその事なんじゃないかなと私は思い当たる事があります。

つまり、私が幼稚園の園長をしていた時に学び得たことは、今までの私たちのもっている常識。いわば美術的な常識ですね。絵を見るっていう事とか、絵を考えるっていう事の常識ではない、もう一つの深い世界があるっていう事を知りました。それでその事をも私たちが日常生活の中で、私たち自身が力を持って子供を見抜いたり、患者を見抜いたり、いろいろな事をするためにはどうすればいいのかと言うと、これはやっぱり私たち自身の一人一人の感性を磨くしか、方法はないんじゃないかと思えます。

こんな事を話している中で、どうしてもお話しておきたい事があります。

今、私の背中のはらには、宮沢賢治がびったりひっついていて、この賢治から離れられない状況になっています。それは私が若い頃、中学の教師をしたときの事です。その働いていた中学のPTA会長が富手一という人でして、また副会長は平来作という人でした。私たちがいろいろな学校行事をしたりしているときに、いちいち文句をつけてくる人たちがこの二人でした。それもPTA会長と副会長ですから、たまったものじゃない。この人たちの必ずでてくる言葉は「賢治先生ならそんなことはしなかった。」と言う言葉です。「賢治先生ならって。そりゃ何なんだ！」と当時私は本当に思いました。なるほど「風の又三

郎」の物語りは知っていましたが、しかし「賢治」という内実身についていなかったんですね。日常生活をしているうちに、その後です、いろいろな教員の仕事をしたりして、今まで来るに至って、今、“賢治生誕100年”であれだけの大勢の人間が岩手県の盛岡に集まってきたり、花巻に集まってきたりする。人をひきつけてやまない賢治。その賢治を背中にしょって人生を生きて来られた平さんと富手さんはすごい。これは私もここに座っておられる皆様方も含めて、いったい何をしょって人生をいきておられますか？今その何かを背負って生きている、何か好きな絵がある、嫌いな絵もある、いろいろな物を背負って生きている。そして目の前には、患者さんがいたり、或いは生徒さんがいたりしている。全人生をかけて一生懸命やっている。しかしよく考えてみますと、話は平凡なところに戻っていくような気がします。

時間も押し迫ってきましたが、私がお話したいと思ってる、研究者の事を少し喋らせてください。

それは、皆さんもご存知の事と思いますが、ルドルフ・シュタイナーの事です。今は青森県に限らず全国的にシュタイナーを研究している先生がたくさんいらっしゃる事だと思います。このシュタイナーが、ご自分の授業で、黒板に絵を描いたそうです。図形化でいろいろな事を教えていたわけです。シュタイナーの黒板絵があまりにも素晴らしかったので、ある一人の教え子さんが、黒板に描いた絵を全部自分のスケッチブックに色鉛筆で写しとった。ところが間に合わない。シュタイナーは描いてすぐ消すからですね。そこで教え子達は仲間と相談して、シュタイナーが描いてすぐ消せないように、黒いラシャ紙のような紙を予め黒板に貼っておいた。そこでシュタイナーが描く。消そうとするとすぐその黒板の前に走って、ラシャ紙を剥がす。そういった作業が続いた。シュタイ

ナーの残した黒板絵は全部で何枚あると思いますか？1000枚残っているそうです。これをドイツではちゃんと管理している。それを世界の美術館とか、研究者たちに貸し出している。

その黒板絵と言われる物をみたととき、教育というのはすごい事をやるのだなと思いました。どうでしょう。板書という言葉がありますね、板書というのは、白いチョークで書きます。しかし私たちは無意識のうちに赤いチョークも使います。そうすると子供達はそれをみたととき、赤いチョークと白いチョークの差ですから、赤いチョークで書かれたことは、白いチョークで書かれた事よりも、重要だと考えるでしょう。そこに緑を使ったらどうなるか？すると緑は赤よりはやや大事ではないかもしれないけど、白よりは大事だぜ。じゃあ黄色は何なのか？赤と青と緑と黄色、或いは白。その色のチョークを使い分けて暗黙のメッセージを子供達に送ろうとしていると考える先生は全国で何人いるでしょう？白いチョーク、しかも最近是最悪な事にツルツル滑るマジックインクで書くような黒板。いやホワイトボードとかって呼ばれています。私は大嫌いなんです。黒板のチョークが飛び散って落ちるというドラマが、もう見えてこない。子供達に大学の教師が夢中になって、時間がたつのも忘れて、黒板に書いてあげて、そしてチョークがパーッと飛び散って、この辺もいっぱいチョークだらけになって最後に胸を張って教室を出ていく老教授、なんていません。(笑い) まあ、それはどうでもいい事です。(笑い)けれども、私が今考えて、日本の教育の問題でもそうですし、いろんなもので足りないものは何かと言えば、私は多分こんな事なのではないかと思う事があります。

人生全体というのは、植物に似ていると言うんです。皆さんどうですか？これは私か言ったことではなくて、シュタイナーさんがある場所でおっしゃっている事です。人生は植物に似ている。そ

うですね。水をやれば育つし、肥料をやればその度にすくすく育っていくでしょう。人生全体は植物に似ている。植物は目にみえぬままの状態を含んでいる。植物自身で言えば例えばナス。我々は若干のナスの知識がありますから、ナスが植えられている状態を見て、あの紫っぽい葉っぱが出ているので、ああこれはナスが植えられているなって解ります。他も知識があるので、これはさやえんどうだぞ。これはトマトだぞ。とか解ります。トマトの下にジャガイモがついて出てくる変なものを考え出して、喜んでいる学者さんもありますけれど、(笑い)その植物が何が出てくるか解らない未知の状態で、新緑の葉をつけた植物を目の前にしている人はしばらくすれば、葉をつけた枝から花が咲き出て何の植物か解ります。その植物は現在まで潜在的にそのような花や実を含んでいた。つまり花や実を準備している。私たちの目に見えないところで、花もつぼみも何もない状態の時から花や実を準備している訳です。現在の目に見えるものからだけ、植物を研究しようとする時、いたい人はこのような花や果実の姿を言い当てることができるだろうか？植物というものの本質を知る者のみ、未来を見分けることができる。私たちが患者さんなら患者さんと、生徒さんなら生徒さんと、その前に座って向かい合わせになった時に、その人の言葉や、顔色とか、服装とかいろいろな事からこの人はどこか患いに違いない。と言い当てる。

会場の皆様方ならプロですから、患者さんを前にして、どこか悪いなって一瞬で解る。なぜ解るかという、それは顔色とか、雰囲気とか、目の移し方とか、目もとをちょっと下げるとか、色々な様相で推量できる。この推量できる力の根源は何かという、実は何っていうことはない、絵を読む力とよく似ているのですね。

つまり「看護という仕事は、アートに物凄い近い場所に位置している」のです。そのアートに物

凄く近い場所に位置している看護の先生が各地方を訪ねた時に、「美術館」に行かない手はない。(笑い)「美術館」に行っても多くの絵を見て、自分自身の感性を磨いて、そして人と向き合う時、今まで見えなかった事が色々見えてくるのではないのでしょうか。

私は看護の事はよく解りません。私を今回呼んで下さった、大串先生たちは、美術家の話もたまにはいいのではないかと、いう事だったろうと思えますが、皆さんは今日、ちょっと珍しい話もあったことだろうと思います。一番最初に出てきたおばあちゃんの秋元さんの話。今日の話ではこの秋元和子さんが随分活躍してくれました。(笑い) このおばあちゃんが感動して打ち震えて、涙を流し、「もう一生忘れないわ」とおっしゃっていた事をもう一度引き出すとすれば、私たちは無駄な人生を送りたくないですね。ですから今日、ここに座っておられる皆さんに最後の最後にもう一

度申し上げたいのは、私たちの感性を磨くには、私たち自身がそれなりの努力をし、動かなければいけないという事です。

幼稚園の園長時代によくおかあさんが、「子供の感性を磨くにはどうしたらよいですか?」と良く聞いてきます。その度に「あなたの感性ですよ。問題は。」と何遍言いたかったことでしょうか。しかし園長職の手前そんな風には言えなかった。(笑い) 母親自身の感性が怪しいのにどうして子供の感性が育ちますかと本当に言いたい日々でした。しかし本当に今でもそう思っています。

これで私の話を終らせていただきます。質問の時間を10分間残すように、との司会の先生の御指示でしたので、これで終りたいと思います。どうもありがとうございました。(拍手)